

2.8 白梅紅梅

私の家の白梅がこの数日の暖かさに誘われて咲き始め、昨日はメジロが来ていました。

梅は、万葉時代に、遣唐使が薬として持ち帰ったものと伝えられていますが、花の美しさ、香りの良さ、実の効用等から、万葉人の心を捉え、多くの歌が詠まれることになりました。

万葉の宮廷人達は、梅の枝を髪に挿し、杯に花びらを浮かべ、漂う香りの中で、酒を酌み交わしたようです。

梅の花 折りてかざせる 諸人は 今日の間は 楽しくあるべし (万葉集 832)

万葉の時代は、梅と言えば、全てが白梅。

しかし、やがて平安時代になると、紅梅が登場して、紅白が逆転し、古今集の紀貫之、凡河内躬恒、紀友則などによって次々と素晴らしい紅梅の歌が詠まれます。

人はいさ 心もしらず ふるさとは 花ぞ昔の 香にほひける (紀貫之)
春の夜の やみはあやなし 梅の花 色こそ見えね 香やはかくる (凡河内躬恒)

は余りにも有名ですが、それらのなかで、私が最も好きな歌。

君ならで 誰にか見せむ 梅の花 色をも香をも 知る人ぞ知る (紀友則)

源氏物語にも、「紅梅」の帖(第43帖)があり、その中で、「按察使大納言(紅梅大納言)」(光源氏の親友の「頭の中將」の次男)が、匂宮に宛てて、紅梅を贈る場面が描かれています。

その際の大納言の言葉。

「御前の花、心ばへありて見ゆめり。兵部卿宮、内裏におはすなり。一枝折りて参れ。知る人ぞ知る。」

[勝手な訳]

(お庭先の梅の花は、ひときわ美しく、心を揺さぶるものがあるように見える。兵部の卿匂宮様は、今、宮中におられるから、一枝とってお贈りせよ。梅の花は、色も香りも知る人ぞ知ると昔から言われているからね。)

紫式部さんは、さすがに古今集の紀友則の歌を引けるだけの才能を持っているんですね。

一方、紫式部さんと並ぶ平安の才女、清少納言さんは、枕草子で

「木の花は 梅の、濃くも薄くも、紅梅。

桜の、花びら大きに、葉色濃きが、枝細くて咲きたる」 (『枕草子』34段)
として、紅梅を桜より前に置いて、絶賛しています。

しかし、私自身は、紅梅より、白梅の方が好きですね。
地味で、華やかさには欠けるものの、花の美しさ、香り、品の良さなど、まだ時折、雪の降る季節の中、凜とした佇まいで、早春を告げる白梅には、心を惹かれる美しさを感じます。

歳を経た老木の白梅の姿は、どこか私に、いつかこのようになりたいという気持ちを起こさせるところがあります。

年老いても、泰然と構え、清々しい心を示すような白い清楚な花をつける、白梅を見るたび、そのような生き方ができればと思います。

我が園に 梅の花散る ひさかたの 天より雪の 流れ来るかも (万葉集 822)

今日の我が家はうっすらと雪が積もる天気。

さて、紅梅と白梅の両方を描いた素晴らしい作品として、尾形光琳の「紅白梅図屏風」があります。光琳の代表作で国宝ですから、ご覧になった方もあると思います。



下に向かって広がる川を中央に挟んで、右に紅梅、左に白梅が描かれています。
右のやや若い女性的な感じのする紅梅に対して、左の白梅は、苔むした老木のどっしりした男性的な姿として描かれています。

白梅を描いた作品として、私は、これに優るものを知りません。

話は違いますが、太平洋戦争末期、沖縄戦で散っていった沖縄第1高等女学校と沖縄女子師範学校の「ひめゆり学徒隊」はよく知られていますが、沖縄第2高等女学校の女生徒からなる看護隊は、白梅の校章から「白梅学徒隊」と呼ばれ、ひめゆり学徒隊同様、多くの乙女達が帰らぬ人になっています。

昭和22年に建てられた元の「白梅の塔」は、白梅の名前にふさわしく、多くの人に知られぬまま、糸満市にひっそりと建っています。



その裏に彫られている言葉。

散りてなほ 香りい高し 白梅の花

3.3 お内裏様のみぎひだり

今日は、桃の節句。雛祭りの日。

この雛祭りに飾られる内裏雛の男雛と女雛の並べ方は、普通、男雛が左、女雛が右とされることが多いようですが、今日は、これに象徴される日本における「左優位」の考え方について、少しお話ししてみたいと思います。



上か下かは、世界中の国において、絶対的な価値基準が存在するのに対して、左か右かは、価値に差が出ないこともあって、地域や時代によって、左が優遇されたり、右が優遇されたりして、甚だ混乱しているのが、現実です。

わが国の場合はどうか？

日本の場合、一般的には、右優位の考え方が優勢と考えて良いのではないかと思います。

例えば、日本では、最も上位に立つ人のことを「彼の右に出る者はいない」と言いますね。

あるいは「彼は遂に左遷されてしまった」などと言いますからね。

日本固有の着物の着付けにおいても、向かって右襟の部分が手前になるように「右前」に着付けるのに対して、亡くなった方に着せる着物は「左前」ですね。

よく言われるアイツの会社は「左前」になったというのは、ダメになったという意味ですから、左はアウトということの意味してますよね。

これに対して、中国では、「吉事尚左、凶事右」と言われ、平時には左が優位に立っているようです。

ただ、「君子、居れば則ち左を貴び、兵を用うれば則ち右を貴ぶ」という老子の言葉通り、平和な時代は左優位、乱世の時代は右優位ということもあって、時代によっては右優位の時代もあったようです。

ところで、日本の朝廷で伝統的に左優位の考え方が続いてきたのは、その昔、随や唐の影響を強く受けていた時代に、ルールが確立したからに他なりません。その当時の中国では、左優先思想が強かったため、左大臣が右大臣より地位が高いとされたのです。お

内裏様は、その影響を受けているのですね。

さて、政治的立場で左（左翼）あるいは右（右翼）というのは、フランス革命時の国民議会で、議長から見て、左に急進派であるジャコバン党が議席を占め、保守・国粋派が右に議席を占めたことからきていることはご存じだと思います。

最近、左と右のグループが、政権を取るためだけに、思想的な立場とは無関係に合体して出来た「民○党」の醜いヘゲモニー争いを見ていると、まだ、左と右の優位を争う対立は死に絶えた訳ではないようです。

ところで、左翼と右翼という言葉はこうした政治的立場以外にも使われることがあります。

例えば、「彼は、優勝候補の最右翼だ」という場合。

ここでも、右は上位に立っていて、左に行くほど順位が下がっていきます。

昔は、一番のビリ、最下位の人のことを「最左翼」と言っていました。

さて、世界の他の国々ではどうなっているのでしょうかね。

ヨーロッパの国については、今ひとつよく分からないのですが、ラテン語で左(sinister)は、悪魔のようなあるいは魔女のようなという意味を持っており、右(dexter)は、利口なという意味があることから、右優位だろうと思います。

そういえば、エンゲージリングは、その昔女性が持っている信じられていた「魔性」を封じ込めるために、教会の神の前で、左手に嵌めたと言われていましたものね。

（今は魔女より格段に恐ろしい方々が多いようなので効き目はありません。念のため）

イスラム教やヒンドゥー教は、そもそも左手は不浄なものとされていたから、これは問題なく右優位でしょうね。

ところで、日本では、左右は、良い悪いを示したり、成功不成功を指し示す場合にも使われます。

例えば、「わが国の将来を左右する問題です」とか「彼の運命を左右するでしょう」とか言う場合です。

でも、なぜか、左と右のどちらが良いのかは決まっていないようです。

最近の政治対応は、まさに「わが国の将来を左右する」重大な影響を持っている場合が多いと思いますが、「右じゃあダメなんじゃあないか」と思って、「左に頼ってみたいけれど、もっとダメだった」というのでは、どうすれば良いんでしょうねえ。

いっそのこと、「わが国の将来を右往左往する」とでも変えた方が良くもありませんね。

3.7 ハマグリの厄日

3月2日は、私の娘の誕生日。

娘といっても、今や、堂々のアラフォー女子ですから、ひな祭りなどとは全く無縁です。ただ、彼女、幼い頃は、どうもひな祭りと誕生日とを一緒にお祝いしたのが気に入らなかったようで、いまだに、損したーという気持ちがあるようです。こういう類いの憾みはいつまで経っても残るのですねえ。

我が家のお雛様たちは、孫がないせいもあって、もう何十年も、屋根裏部屋住まい。兜飾りといい、クリスマスツリーといい、屋根裏を占領している大きな箱は、みな子供のものばかりですね。

さて、ひな祭り前日に当たる2日に娘の誕生日の食事会をしたのですが、ひな祭り定番のちらし寿司と蛤のお吸い物はなし。

こういう定番ものは、ないと必ず誰かが食べたいと言い出すから不思議ですねえ。昔ならともかく、今では別にこの日でないと食べられないというものではないのにね。

物の本によると、ひな祭りにハマグリのお吸い物が出るのは、ハマグリの2枚の殻蓋が、同じ貝の殻同士でないと絶対(!)に合わないことから、将来運命の人と結ばれてずっと添い遂げられるようにという願いが込められていると解説されていますね。

まあ、確かに、昔からハマグリを使った貝合わせなどの遊びがありますから、普通は、そうかと納得してしまう方が多いようです。



でもね、これをいうと、白けてしまうことが多いので、今まで殆ど言ったことがないのですけどね、ホントはね、ときどき別の殻でもぴったり合っちゃうんですよね。

研究者の報告によると、その確率はおよそ5%位。

20枚に一枚の割合で違う相手と合っちゃうのですね。

ハ、ハ、ハマグリさんも、浮気するんですね。

う、うっそーじゃありません。

う〜ん。

まあ、ハマグリは漢字「蛤」も、「合」という字が入ってますから、5%位の誤差は大目に見ますかね。

でも、日本の伝統行事の本などを見ると、ハマグリは「同じ貝でないと絶対に合わないことから云々」と書いてあるのを良く目にしますから、何事も、「絶対」なんて言葉を使うときは気をつけることにしましょう。

ところで、私、若い頃、ハマグリは漢字「蛤」が「虫」偏になっていて、蛙や蛇や蛸と同じなのを気持ちが悪く思っていたのですが、皆さん、なんとも思いませんでした？

大学生の頃、調べてみたら、昔の中国では、人、獣、鳥、魚以外は、一括して虫という字で総称していたことがあったのですね。ですから、貝やは虫類は、人でも、けものでも、鳥でも、魚でもないから、虫。

今でも、蛭や浅蜷にはちゃんと残ってますよね。

さて、近年、ひな祭りはハマグリさんにとって大厄日になってしまったけれど、旧暦 3月 2日は、大潮の日。

少し暖かくなってきた旧暦のこの日、みんなで海に入って潮干狩りをして採った貝を、3日にひな祭りのご馳走にしたのが本来の由来らしいですから、昔は、別にハマグリさんでなくてもちっとも構わず食べてたんですね。

少し前に、環境省さんがハマグリを絶滅危惧種に指定していましたから、私、そろそろハマグリさんに代えて、浅蜷さんにしたらどうでしょうかと思うのですけれど。

アメリカの七面鳥さんにとってはクリスマスが厄日ですけど、日本では七面鳥さんに代えてニワトリさんにしても誰も変だと思わない。

どうでしょうかね、この際、実際には誰も守っていないような明治以来の古い道徳観の貞節なんかを口実に「ハマグリ」さんにこだわることはないような気がするのですけどねえ。

と、この時期になると、心の中で叫んでいるのですが、今のところ、口に出すと禍いがありそうな気がして、黙っている気の弱い私です。

3.15 淡雪（名残り雪）

今日は、折角の連休というのに、雪。

今日の雪は、降ってもすぐに溶ける「あわゆき」。ほども、ほどもに降りしいて、足許はどろどろ。



ところで、「あわゆき」には、「沫雪（泡雪）」と書く場合と「淡雪」と書く場合がありますね。

万葉集などでは、冬に降る水の泡のようなやわらかな雪のことを「沫雪」と言っていますが、「淡雪」の方は、平安以降、比較的後になって使われだした言葉で、春先に降る雪のことです。積もることなく、すぐ解けてしまうはかない雪のことですね。

沫雪の ほどもほどもに 降りしけば 奈良の都し おもほゆるかも （万葉集巻8-1639）

（沫雪 保杼呂保杼呂尔 零敷者 平城京師 所念可聞）

これは、帥として太宰府に下った大伴旅人クンが、降る沫雪に託して、奈良の都（にいる長屋王（高市皇子の子））のこと（泡のような運命）を心配して詠んだ歌ですね。この後、まもなく、長屋王は藤原氏の陰謀で死に追いやられます。

他方、淡雪の方は、なんと言っても、和泉式部さんのこの歌。

などで君 むなしき空に 消えにけむ 淡雪だにも ふればふるよに

（和泉式部集

3-449）

歌の前書きに、「内侍のうせたるころ、雪の降りてきえぬれば」とあり、愛娘「小式部内侍」を失った母の気持ちが痛いほどわかる最高の挽歌の一つです。

淡雪のはかなさにもまして、何よりも大切な人の命が消えていく儚さが伝わってきます。

（小式部内侍は、権中納言藤原定頼クンへのしっぺ返しの歌「大江山 いくののみちのとおければ」で有名ですね。参照「正月」の『百人一首の親子関係』）

ところで、古典は余り得意でない方のために、ちょっと古いけれど、こういう淡雪もあります。

♪ カチューシャかわいや わかれのつらさ / せめて淡雪 とけぬ間と /
神に願いを（ララ）かけましょうか

これは、大正の初め、島村抱月と松井須磨子の「復活」で歌われた劇中歌「カチューシャの唄」の一番の歌詞。

別れに際して、この辛い別れが、せめて淡雪が溶けるまでの短いものであって欲しいと神に願う恋人達の歌として、一世を風靡し、今でも知っている人が多いですね。

カチューシャと言えば、
団塊の世代の方には経験がある歌声喫茶で流行ったロシア民謡「カチューシャ」

♪ りんごの花ほころび
川面（かわも）にかすみたち
君なき里にも 春はしのびよりぬ

残念ながら、こちらの方には淡雪は出てきませんが、「君なき里」は、戦争に行った恋人の帰りを待ち焦がれる思いが歌われています。

ところで、カチューシャは、ロシア語で「エカテリーナ」の愛称であることはご存じかと思いますが、これは、フランスでは「カトリーヌ」、英語では「キャサリン」ですね。

私、どうも、カチューシャはともかく、「エカテリーナ」には偏見があって、どうしてもロシアの女帝で専制君主の「エカテリーナⅡ世」を思い出してしまうのですね。

昔、若い頃、麻布狸穴にある「ソ連大使館」の近くにいたことがあって、出入りする若い女性を見ながら、「カチューシャ」という言葉を思い浮かべていたのですが、これが50代の女性になると、例外なくブクブク太って、腕など私の足ほどある「エカテリーナ」になるのを、あな、おそろしや、くわばら、くわばらと思ったことを思い出します。

アレ？ いつのまにか、淡雪の話がどこかに行ってしまいました。

現代の淡雪を歌った代表作は、イルカの「なごり雪」。
別れに際して気づいた淡い恋。積み重ねる間もない泡沫（うたかた）の恋。

♪ ときがいけば、幼い君も大人になると 気づかないまま
今春が来て 君はきれいになった
♪ 君が去ったホームに残り、落ちては溶ける雪を見ていた
今春が来て 君はきれいになった

もう、淡雪のような恋ができる歳ではなくなった私ですが、心の炎が消えぬ間というのは、淡雪が消える間と同じくらい短いのだということが、やっと少しだけわかってきたこの頃です。

3.16 辛夷の花

私の家の近くでも、辛夷の花が咲く頃になりました。

辛夷の花を見ると、仙台に住んでいた頃、岩手に旅行したときのことを思い出します。北上から遠野に行く途中、低い峠を越えた山の中に真っ白な雪のような辛夷の大木が見えたのです。

そのとき、私はそれが辛夷の花だとは知りませんでした。

しかし、その周りを明るくするほど、美しい風景に、私は、車を止めてしばらくその花の輝く様子を見ていました。



夕日なお 暮れなづみたる 山裾に 辛夷の花の しろじろしけれ (佐々木信綱)

その小旅行以来、「北国の春」は、私の好きな曲の一つになりました。

その後、東北の各地を訪ねるごとに、辛夷の木は農家の庭にも多く見られることに気がつきました。

この花が「種蒔きサクラ」と呼ばれていて、農業にとって特別の意味を持ったものだという事も知りました。

この花が咲くと、春はすぐそこです。

こぶしの花が匂います
うらうらといい日和です

こぶしの花が咲いてます
しらじらとすんでけだかく

こぶしの花がゆれてます

ぽっかりとおぼろ月です

こぶしの花が匂います
花の野に鐘がなります

これは、1930年に作られた「こぶしの花」
画のような風景が見えるようです。

やまなみ とほに 春は来て こぶしの花は 天上に
雲はかなたに かへれども かへるべしらに 越ゆる路 (三好達治)

辛夷という名前は、
「化辛為夷」からとられています。

辛い苦しみを化えて、平穏な状態に為すという意味が、辛夷という言葉には込められて
いるのです。

だから、辛夷の花が沢山咲く年は良い年になる、と言われているのです。

東北の被災地に、今年は沢山の辛夷の花が咲くことを、心から願っています。

人悼むごと 辛夷咲き こぶし散る (稲畑廣太郎)